葛藤 延命か寿命か

迫る2025ショック ③

7部 胃ろうの選択

連載に登場した大垣進さんの訪問看護師だった大西美智子さん(56)が、今でも心に引っかかっているケースがある。昨年3月、筋萎縮性側索硬化症（ＡＬＳ）で亡くなった横浜市神奈川区の田渕誠紀さん（享年68）だ。

2012年3月、大西さんは、口から食べられなくなってきていたので、妻の倫子さん(70)に「胃ろうにしたらどうでしょうか？」と提案した。倫子さんは「胃ろうにしても（ＡＬＳは）治らないのに、何でそんなことするの？」と消極的だった。

どちらが誠紀さんのためにいいのか、葛藤があった。でも「意識はあるが体を動かせない」という本人の心の内を考えると、胃ろうにせず、寿命で逝った方がいいのでは、と考えた。

倫子さんは元々「自然死主義者」だった。誠紀さんは「胃ろうにしてもっと生きたい」と考えていたが、倫子さんに遠慮して言えなかった。

大西さんは、毎週のように倫子さんに、胃ろうの話をした。「ご主人は（気管切開して人工呼吸器をするかなど）将来のことを悩んでいる。考える時間を与えるためにも、胃ろうにした方がいいんじゃないかな」

「延命はいや」。倫子さんの考えは変わらなかった。

5月、居間で3人で話していたときのことだ。倫子さんは「この人（誠紀さん）は、どう思っているの？」と大西さんに尋ねた。

「ご主人はつけたいと思っているわよ」。すると倫子さんは、玄関に行って、「自分で言えばいいのに」と泣いた。

翌週、自宅を訪ねると、倫子さんは言った。「本人がやりたいなら、胃ろうにしましょう」。本人の「生きたい」という意欲を尊重したかった。

決まってからは、胃ろうの使い方や注意点を熱心に聞いてきた。栄養剤を予定の半分しか入れられなかったり、下痢をしたりしたこともあったが、倫子さんはきっちり胃ろうの管理をした。

10月初旬、誠紀さんは大西さんに正直な気持ちを伝えた。「僕は生きたい。（2歳の）孫が小学校に入るまでは生きていたい」

「でも気管切開し人工呼吸器で寝たきりの生活に耐えられるかどうかわからない」

大西さんは「じゃあ、みんなで話し合う場を持ちましょう」と提案した。数週間後、主治医や長男(44)、長女(41)らも交え、今後のことを話し合った。

長男は「本人のいいようにとは思うが、母への負担が大きい」。長女は「両親にとって、お互いが負担にならないようにしてほしい」。2人とも、どちらかというと倫子さんの立場に近かった。

倫子さんは、めまいを起こしたり、心臓が苦しくなったりしていた。体重も10キロほど減った。心身ともにギリギリで誠紀さんを介護していた。結局、気管切開はしなかった。

胃ろうにして約9カ月。昨年3月23日明け方、誠紀さんは、眠ったまま天国へ旅立った。前日には、窓越しに「最後の桜」を見ることができた。

昨年3月、田渕誠紀さんは、孫らに68歳の誕生日を祝ってもらった。この約2週間後に旅立った＝横浜市、妻の倫子さん提供